

長野県埋蔵文化財ニュース

No. 4

1983. 3. 19

(財)長野県埋蔵文化財センター 〒380 長野市長門町1097 ☎0262-34-2848
岡谷調査事務所 〒394 岡谷市郷田2-7260 ☎02662-4-0522



(現地説明会——中島遺跡)

(7頁参照)

調査の公開

発掘調査の成果は報告書、展示会、報告会、現地説明会などのかたちで公開されています。なかでも「現説」とよばれている調査中の遺跡での説明会は、実物の遺構を直接見ることができる点で遺跡への理解を深めるための効果的な手段です。時間的、人的に過重な調査を行なわざるを得ない状況が少なくないなかで、広範な市民を対象に説明会を開催することは負担にもなりますが、もつと普及させてよいこと



だと思われます。発掘調査中に一度は現地説明会が行なわれることが慣例化している地域もありますが、が、残念ながら県内ではまだ必ずしもそうではありません。現地性という点は、文化財の重要な要素となるものであり、調査結果だけでなく、調査過程も共有できるような方向に進められれば、保護の展望を開くことにも結びつくことだと思われます。

また、現地で速報的なパンフレットが調査期間中継続して出されることも多くなりました。その内容の多くは現場で発掘作業に携わっている人達を対象としたものですが、報告書では見ることのできない興味を持たれる記述もあります。このような刊行物や現地説明会の情報などは広くても一市町村内程度にしか伝わらないことが多く、残念なことです。本誌は季刊でもあり、広報手段としては難しい点もありますが、今後はそれらの紹介もしていきたいと思っていますので、情報をお寄せください。

センター発足一年を経過して

常務理事 三村 忠幸

昨年3月に中央自動車道長野線の起工式が行われまして、これを機に、この自動車道の基点である岡谷市に市の建物を借用して私どもの現地調査事務所が設けられ、4月8日に開所したのですが、それこそすべて無からの出発でした。机・椅子・書棚・事務用品の購入をはじめ、発掘調査に必要な器具・器材の発注、作業員の募集、就業規則の制定、発掘調査に関係した地権者代表・行政機関との連絡調整等々、行政職2人、教職員10人が、まだ、顔と名前が一致しないなか、文字どおり目の回るような動きをしました。

物を購入しようと思えば電話一本すればすべて間に合う時代であるにもかかわらず、“財団法人長野県埋蔵文化財センター”の効能書きを縷々説明し、真に信用できる旨を懇切丁寧に話してもなかなか理解してもらえず“現金払いなら結構です”とツケがきかない状況もありました。時期的に肝腎な資金が手元にきていなかったこともあって、とりあえず、私の名刺を職員が持参して出向いても、私のところへ電話で“長野県リゾウ文化財センターですか？ 確かにありますね？”と云うような始末。

このような状態も市の教育委員会を煩わし、保証して頂くことにより切り抜けることができました。

作業員については、かつて製糸業で繁栄した岡谷市が精密工業に脱皮し、著しく進展をみている現在、人的資源面、待遇面いずれからも予定する人員の確保は非常に困難であろうと関係者からはいわれていました。

新聞で募集広告をしたところ半分にも満たない状態。困り果てていたところへ報道関係の方々がみえ、埋蔵文化財のために“ヒト肌ぬごう”ということで翌日の紙上に大々的にとりあげてくれました。お陰でそれから3日を経ずして予定を上回ること20人の応募者があって、ホット胸をなでおろした次第。

発掘調査に当っては、年度当初埋蔵文化財包蔵地並びに周辺用地の買収が殆んど進んでいないなかで市から市有地を提供して頂けたこと。また、市有地部分の調査が終りかけて、民有地の買収見とおしがつかず、調査の継続が危ぶまれたとき、一部地権者の方々から所有権の移転登記ができなくても埋文調査に協力しようというまことに有難い申し出があったこと、さらに、

は県、市の行政関係者の全面的な御協力があったこと等々いろいろと想起されてきます。

開所当初のころ、どのような結末になるだろうかと危惧の念でいっぱいでしたが、発掘調査は計画どおり実施することができました。これもひとえに関係の皆様方や地域の方々の深い御理解と暖かいお力添えがあったればこそと感謝をしておるところでございます。発掘調査の結果判明した主な遺構、遺物は、旧石器製作址、県下最古の火葬墳墓並びに県下初出土の同墳墓の副葬品“瑞雲双鸞八花鏡”でありまして、大きな成果が得られ望外の喜びでした。

このほか、更埴市の森將軍塚古墳、豊野町の上浅野遺跡の発掘調査にセンター職員1名を派遣することができ、また、現地説明会、遺跡見学に多くの地域の方々の参加が得られ、センター設立の趣旨にいきさかでも沿うことができ嬉しく思っているところです。

あわただしい一年で、しかも、タドタドしい幼児の歩みのようであったかもしれませんが、これから^は着実に力をつけて伸びていきたいと考えております。

皆様方の一層の御支援を賜りたく存じます。

57年度調査を終えて

調査第1部長 神村 透

57年度は岡谷市内9遺跡中7遺跡12,970㎡の発掘調査を、予定通りに終了できてよかった。が、その中から今後への問題をいくつか得ることができた。

1 調査地が用地買収されていること

調査した7遺跡中5遺跡は用地買収されていない中の公有地、交渉中了解を得た土地の調査であった。そのため遺跡の全体を調査できない、土をおけない。機械を導入できない、耕作している周囲の耕地への配慮など、余計な心づかいと、無駄な時間を使ってしまった。また、交渉との問題もあって、調査の具体的な工程がギリギリまでたてられず苦勞した。

今後の発掘調査には、関係各位の深い御理解を頂き調査が容易に出来るようお願いをいたしたい。

2 工事工程との関係について

今年度は買収のおくれで、調査にも、工事にも入れなかったが、来年度は、工事の発注もすすみ、工事工程がおしせまってくる可能性があると思えるが、埋蔵文化財保護の立場から、十分に調査が出来るよう、

工事関係との調整が図られなければならない。

3 作業員の確保

今年度は何とか作業員の確保ができたが、長期間のうちに人数がへっていくことが問題である。来年度からは100人をこえる人数となると、その人数の確保には各方面の協力を得なければならない。

4 機械の積極的利用

今年度はほとんどが人力であったため、表土の排土に日数をとられた。用地買収がすんでいなく、調査地に機械を入れられなかったためである。来年度は機械

を入れて、調査の主体を遺構確認におきたい。

5 遺跡の意外な広がり

分布調査で用地内の遺跡範囲はおさえられているが、調査して見ると、範囲外に遺跡が広がっていたり、当初確認できなかった時代の遺構を知ることが多い。さらに、遺跡としておさえていない所からも遺跡、遺構の確認があるので、調査受託前の再確認と、範囲外へも広げれる調査、道路用地内の確認調査できる方向を位置づけてほしいことを願うものである。

北西久保遺跡の調査

佐久市教育委員会 林 幸彦

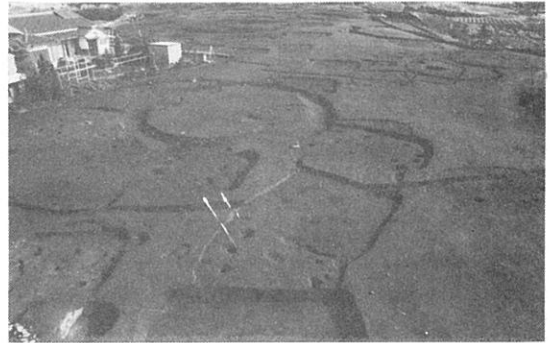
北西久保遺跡は長野県佐久市大字岩村田字北西久保に所在し、昭和41・45年に台地の南側緩斜面から南方へ伸びる段丘上の調査がなされ弥生時代の土壌墓と中世の五輪塔が検出された。さらに昭和54年には、台地上全域の確認調査を実施した。その結果、弥生時代中・後期、古墳時代和泉期、平安時代の各住居址群、10数基の古墳群等が確認された。

今回の調査は、信学会による短大建設に関わる事前緊急発掘調査で、57年6月1日より開始した。

台地上全般において沖積世の堆積は薄く遺構の残存部も浅い。検出した遺構は、住居址92件で時期別では、弥生時代中期45軒、同後期18軒、古墳時代五領期1軒、和泉期18軒、奈良時代1件、平安時代8軒、時期不明1軒となる。さらに、弥生時代の方形周溝墓1基、古墳8基が検出された。その他土壌、溝状遺構、配石をもった特殊遺構や長方形の掘り込みの上部に集石を伴う土壌等がある。

これらの住居址群は、弥生時代中期はほぼ台地全域に、弥生時代吉田期は台地の西側に、古墳時代和泉期と平安時代は台地の東側に偏在している。

住居址の規模・形態の特徴を列配してみると、弥生時代中期は一辺5m前後の方形プランを呈するものと、5.5m×4mの長方形プランを呈するものの二者が大部分を占め、楕円形プランは1軒のみにみられる。弥生時代後期は、6m×5m、4.5m×3mの長方形プランを呈す。炉は吉田期において「L」に石を配したものが半数を越える。古墳時代和泉期は全般に大形で一辺が6m前後の方形プランを呈し、炉は地床炉で北側の主柱穴間に設けられている。平安時代は一辺5m前後の



北西久保遺跡全景(西方より)

方形プランが主で南東コーナーにカマドを持つものが多い。

出土遺物は、弥生時代中期では壺・甕・高坏・坏・甗などの他に、磨製石包丁・石斧・片刃石斧・小形磨製石斧等の石器も多く出土した。さらに、鳥形土器や土笛様土製器等特異なものも出土している。

古墳時代は、一号古墳より円筒埴輪・人物埴輪・器財埴輪が多量に出土し、さらに住居址内からは和泉期の甕・高坏・埴等が多く出土し、特に埴・高坏の量が多い。

以上のように本遺跡の調査結果は、当初の予想を上回る多大な成果が上り、特に弥生中期後半の大規模な集落、佐久地方では数少ない後期前半の吉田期のまとまった資料等が注目されよう。さらに、本遺跡の拡がり、台地の南西方8000㎡に及び70～80軒の住居址が確認されていて、しかも、その主体は弥生中期後半の住居址群である。該期の集落等を把握する上でも貴重な資料を内蔵している遺跡である。

研修内容報告

(1)環境考古課程

センター調査研究員 百瀬 長秀

去る10月20日から11月5日まで奈文研の研修「環境考古課程」を受講する機会を得た。その内容（講議の題目ではない）を順不同に列記すれば、以下のような豊富さである。

環境考古学の現状と問題点 古環境復元方法の問題点と地質学 土壌調査概論 火山灰調査概論 地形概論 花粉分析による古環境復元方法 プラントオパール分析による水田遺構調査方法 植生概論 樹種同定と年輪年代学 獣鳥魚骨の概要 第四紀動物相概要 人骨調査概論 食用植物調査方法 食糧資源量の復元方法 貝類からみた環境変化復元方法 鳥浜貝塚の調査 野尻湖遺跡の調査 里浜貝塚の調査 石材の問題等

各分野の第一人者はばかりを講師に迎え充実した内容であったが、その中から得たいいくつかの問題点をあげて、我々が学び実践すべき事柄を考えてみたい。

発掘調査報告書には必ず環境の項があり、現在の地形・地質・気象・植生等が述べられる。又、自然科学の方法による分析結果が付される事も多い。しかし古環境という項は減多にないし、古環境と遺跡とが有機的に分析される事も少ない。これは、古環境復元という視点が欠落しがちであり、調査の中で実践するのが大変難しい事の証拠であろう。古環境の重要性は多くの研究者の説く所であり、遺跡全体或いは地域全体を理解しようとする時、この要素がいかに重要な位置を占めているかは、今更言うまでもない。発掘調査に関わる者としては、まず第一に古環境という視点を持つことを挙げねばならない。

調査の中で環境復元を実践するには関連諸分野の研究者との共同作業が必要である。多くの分析方法は我々の手に負えないし、生半可な方法は危険である。しかし、だからと言って環境復元はすべて他の分野の研究者等に「御任せ」することはできない。今回の講師の一人である那須孝悌氏の受け売りになるが、色々な分析を総合し全体を把握するのは考古学研究者である。遺跡を把握する中での環境復元という視点は、調査担当者以外では持ちにくい。我々としては諸分野の分析の基本的な方法とその有効性や限界を理解しなくては

ならないが、理想的には継続的、計画的な共同調査チームを作りたい。実際にはごく限られた分野の研究者とのチームができればよい方であろうが、総合的な体制ができるよう努力してゆきたいものである。共同調査については、野尻湖遺跡の調査から学ぶべき事が多い。

さて、具体的な事柄をいくつかあげてみよう。

層位の問題で地質学との落差を感じ事がある方は少なくないだろう。我々の求めるタイムスケールは地質学にとっては小さすぎるのと、我々の側が堆積学の基本を本当には理解していない事が多いのが喰い違いの原因であろう。ところが、土壌学者が行なう分層は我々のそれと共通する場合が少なくない。案外馴じみが薄い分野であるが、地質学的層位と土壌学的層位、土壌化現象の問題等、我々と直接関連し学ぶべき事柄が多い。地質学と共にその基本を学んでゆきたい。

もう一つ土の問題をあげる。土の質の観察・表記方法は、とりわけ県内では個々ばらばらな傾向が強い。地質学・土壌学からみれば、地層の成因や変遷、土壌現象の進行程やそのプロセス、母材の供給のあり方等本質を把握するのに有効な観察を行ない表記するよう務めているわけだが、考古学の側ではこうした意識は比較的低い。関連諸学との共通資料を提示できれば、逆にその分野の成果を取り入れることも容易になろう。粒径組成による土性（土質）分類、土壌硬度計を用いた硬度表示、土色帖を用いた色調の統一表記等は、我々の間でも不一致な部分を統一し、共有資料を増やす上でも取り入れたい方法である。

調査の実例のうち、その内容が公表されていない里浜貝塚（宮城県）について一部を紹介して締めくくるとしたい。松島湾の宮戸島にある里浜貝塚の学術調査は現在も継続中である。予備的な調査の中で注目すべきは、ハンドオーガーを用いて土壌柱状図を作成し、時期毎の微地形を復元し遺跡構造を予測している事である。発掘調査はグリッド法で継続的行なう。発掘のポイントは、層・ブロックの平面的な広がりをとらえ、上下関係を抑える点にある。これらは原則として平面的観察で把握する。各層・ブロックの土性を記録し、構成物すべてをサンプリングする。サンプルの総量を計測し、水洗・ふるいがけを行なって有機質の微細遺物まで網羅的に取りわけ。自然遺物は現生標本と対比し同定するが、標本作成を含めてすべて発掘担当者が行なっている。この努力は敬服に値しよう。このような方法により1単位の層・ブロックの内容が可能な限り詳細に把握され、各々の季節性や生活のパタ

ーンが捉えられつつあるという。こうした方法をそのまま模倣するのは難しいが、低湿地帯の調査には早速取り入れるべき点が多い。

気づいたままに書いたが、調査を実践する中で、少しずつでも内容を豊かにするよう意識し努力したいと考える。

(2)集落遺跡調査課程

大町市教育委員会 社会教育主事
木村 隆一

大町市では、昭和54年より56年まで、3ヶ年にわたり市内平地区にある、借馬遺跡の緊急発掘調査を行いました。その間の発掘面積は約33,000㎡に及び、検出された遺構等は、遺物からの相対年代区分により、弥生時代後期より11Cにわたるもので、堅穴住居址83、掘立柱建物址36を始め河川址、溝址、小型のピットなど、当市始まって以来の一大発掘調査となりました。この発掘調査では、今まで推理や想像でしか語る事のできなかったこの地方の歴史に、いくつかのヒントや、解答を得ることができましたが、それ以上に、解明できないものも数多く現われました。そんな中で今回国立奈良文化財研究所埋蔵文化財センターで開催された、専門研修「集落遺跡調査課題」に参加しました。研修の内容としては、日本国内における各時代の集落遺跡の調査における、問題点と今後どのようにその問題解決のためにとりくむのかという理論的なものが多く、実際の発掘に当たっての技術研修はありませんでした。

借馬遺跡の発掘にあわせて研修内容の一部を問題点としてとり上げると、次のような2つの事項が上げられます。まず第一は集落遺跡の規模と発掘面積に関係がありますが、集落全体の性格を判断するための方法です。集落遺跡の場合、集落全体を発掘できたケースは全国的にも少なく、集落の性格を知るには、可能な限り広い面積を発掘する必要がありますが、できることなら、集落全体を発掘調査することが望ましい、ということでした。借馬遺跡でも同様にだいぶ広い面積を発掘したのにもかかわらず、集落全体から見るとその一部の発掘調査にとどまってしまう、やはり集落の性格を判断するには、資料不足の点が数多く見られました。中でも弥生時代後期～古墳時代にかかる時期については、いろいろな方向での考え方がある中で、よい資料になるべき発掘であったにもかかわらず、発掘

区内にその時期の遺構を見い出せませんでした。

次に、現在の借馬地区の水田面に至るまでには、幾層もの水田面があるものと考えられます。しかし広範囲の開発事業に伴う緊急発掘調査では金銭的、時間的など、いろいろな形で制約を受ける中で発掘調査が進められるわけですが、水田面の検出ひとつをとっても、数多くの事前予備調査が必要になるのにもかかわらず、それらの制約のため機械力に頼ったりしなければならぬことも多く、水田面の検出はますます困難になってしまっています。この問題も集落の性格を知る上には、なくてはならない調査項目になると考えます。

その他に集落の性格を知る上に必要な資料としては墓についてでしょう。特に今までは古墳はあってもそれを造った人々の住んだ場所が無いとか、借馬遺跡のように、古墳時代を中心とする堅穴住居址が数多く検出されているのにもかかわらず、集落の立地に合った古墳が発見されていないなど、いろいろな調査が別々にされているケースが多いのではないのでしょうか。やはり文明の発達した現代社会の中では経験に加えて、測量機器や電算機などを最大限に利用した積み立てた調査が必要になってくるのではないかと思います。

2つめは、報告書の発刊についてです。緊急発掘調査は必ず時間的な制約があります。そんな中で現場での発掘調査は終了したが、その成果を整理研究する時間を持つ事ができないように思えてなりません。発掘の調査状況だけを記載した報告書になってしまっているのが当市の現状です。発掘の成果をもっと有効に利用して考え推理し、また、科学的に処理し判断しながら研究を深め、正しい歴史を後世の人々に伝えていくのはいうまでもなく、今日生活している私達の責務ではないのでしょうか。

(3)埋蔵文化財基礎課題

豊野町教育委員会 渋谷 二郎

私が、奈良国立文化財研究所が開催したこの研修会に参加したのは、昨年(平成25年)の9月6日から9月10日までの5日間でした。

今回の研修は、行政の文化財事務担当者、それも発掘調査等の経験が浅いものに限られており、内容も文化財保護の基礎的知識の修得を目的とするものでした。参加者は35名で、北は北海道から南は熊本県までと幅

広く、年齢も20才から42才までとさまざまでした。

ここで、研修の内容を紹介しておきます。

- 1 日目 遺跡の保存と活用（田中琢埋文センター長）
- 2 日目 遺跡保存と文化財保護法（和田勝彦文化庁文化財保護調整官）
埋蔵文化財保護の問題点（検討会）
- 3 日目 発掘調査の実際（町田章埋文センター集落遺跡研究室町）
日本考古学の現状と問題点（木下正史飛鳥藤原宮跡発掘調査部考古第二調査室長）
- 4 日目 飛鳥・藤原宮跡保存整備状況見学（安原啓示埋文センター保存工学研究室長）
- 5 日目 調査方法の進歩とその適用（松沢亜生埋文センター考古計画研究室長）
諸外国の遺跡保存（佐原真理文センター研究指導部長）

レポート作成、提出

研修は、午前9時から昼休みの1時間をはさんで、午後の5時まで行なわれました。この中では、何といっても、4日目の飛鳥、藤原宮跡の見学が印象に残りました。例年では、この見学はマイクロバスで行くことになっていたそうですが、今年からは、レンタサイクルを利用して行われました。飛鳥駅より自転車に乗り、高松塚古墳、石舞台古墳、水落遺跡、藤原宮跡などを1日かかりで見学したわけですが、保存、整備の充実ぶりには目をみはるものがあり、また、藤原宮跡などにみられる公園化等、住民の憩いの場としての活用方法も理想的ではないかと感じました。

最後に、今回の研修を通して、文化財保護の基礎を学んだばかりではなく、我々にはこれらの遺産を後世に残し伝えていく責務があるのではないかということを感じました。

埋文施設紹介(2)



信濃国分僧寺跡、尼寺跡は、上田市大字国分に所在する。昭和5年11月19日に史跡指定を受けたが、この地域は昭和30年代に入ると急速に土地開発が進み、周囲に住宅や工場が建てられるようになってきた。このような状況のなかで、地元研究者、住民のなかから保存対策を望む声も大きくなってきた。これらの声を受けた上田市では昭和38年から同46年にかけて計8回の発掘調査を実施し、保存対策を講ずることになった。発掘調査では、僧寺と尼寺の全容が明らかにされ、僧寺と尼寺が隣接して建てられていたこと、ともに東大寺様式の伽藍配置をもったことなど明らかにされた。また、発掘調査に並行して史跡保存計画が立てられ、これにそって昭和43年から同46年にかけて、土地買上げと保存整備が行なわれた。なお、昭和43年3月19日に、現国分寺境内を含む国分寺史跡公園の周辺約15万㎡が国の史跡として追加指定されている。

信濃国分寺資料館は、史跡公園と一体となった学習を行える歴史博物館として昭和55年7月に開館した。

「信濃国分寺を中心とした上田、小県地方の歴史博物館」として、上田市立博物館の考古部門を切り離し、これを充実する方法をとった。

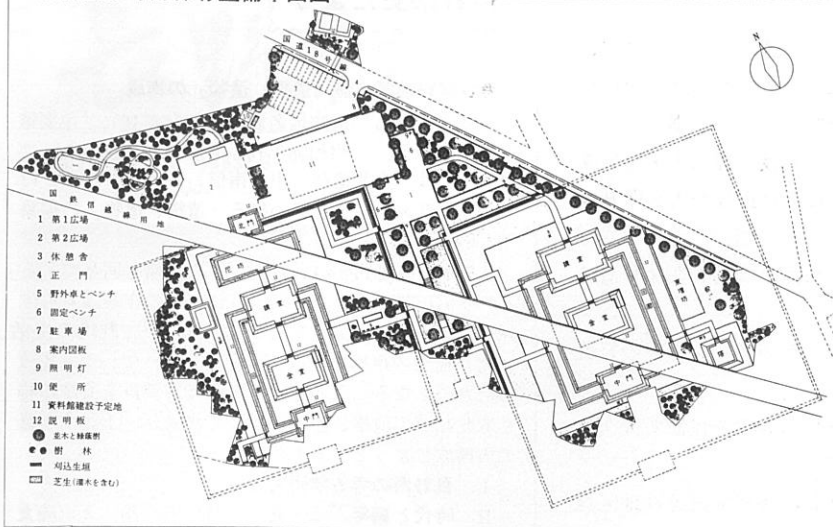
信濃国分寺史跡公園

史跡公園は55,000㎡の広さをもち、発掘調査の結果をもとに、僧寺、尼寺の遺構を復元する方式で整備が行なわれている。遺構は他の平地より区分し高くもりあげ、伽藍は埋戻し式基壇復元方式で遺構の在存をわかりやすくしてある。各遺構間は歩きながら回れるように歩道でつないでいる。二寺の寺域内にはできるだけ構造物の建設をさけ、さらに樹木の植栽も少なくしてあるが、それ以外の所は樹林や並木が植えられており、公園西側には万葉植物園、雑木林なども造られている。史跡公園の施設としては、市民が自由に憩えるように、野外休憩所5ヶ所、広場1ヶ所、屋内休憩所1ヶ所、水のみ場7ヶ所、照明灯14ヶ所、説明板5ヶ所などがある。また、史跡公園北側には瓦窯跡観察施設もある。これは、発見された2基の瓦窯遺構のうち1基を露出展示することにより瓦窯の構造を観察できるようにしている。

資料館

国分寺資料館は史跡公園の西側に建てられた、建築

信濃国分寺跡保存整備平面図



面積1,053㎡、建築延面積2,004㎡の地上2階、地下1階の鉄筋コンクリート造りである。地階は機械室。1階は収蔵庫、研究室等資料の収集、保管にかかわる施設が置かれている。2階は一般観覧者が利用する施設で、展示室、講堂などがある。また、2階の外側には回廊があり、国分寺路を一望することができる。当館は先にも述べたとおり、上田、小県地方の古代史博物館として発足した関係上、おのずから考古博物館としての性格を強くしている。それゆえ、展示自体も考古資料を中心とした展示となっており、収蔵資料も考古資料が主である。

信濃国分寺跡の発掘調査をはじめとする、近年の調

査によって得られた大量の考古資料を収蔵している当館では、これらの資料を保存・活用することによって、市民生活の中に地域の歴史を正しく理解し、郷土を愛する心を育てていく手助けをすることが役目でもある。

資料の収蔵関係では、市教委社会教育課が担当する埋蔵文化財発掘調査で得られた資料を受け入れ整理保管するのが現在の主な仕事のひとつとなっている。本来ならば、資料館自体の目的意識をもった調査を行い、

資料収集活動を行うべきだが、現在の職員体制ではそれもままならないのが現状である。ただ、当面の活動として、全国の国分寺関係の資料収集を地域の研究者の協力を得て行っている。これは現地調査を主体とした資料収集である。

収蔵資料をもとにした社会教育活動では、展示室を中心としたものの他に、「市民講座」や「考古学教室」などを開催し市民との接触を多くしている。常設展示では定期的に資料の展示替えを行い、特別展示では年1～2回特定のテーマを設定し開催している。

当館は発足してはや3年目を過ぎようとしている。不十分な職員体制ながら、地域に根ざした特色のある資料館とすべく今後も努力していきたい。

センター今年度調査の公開について

調査の公開は当センターの寄附行為に定められている事業「埋蔵文化財の公開・活用及び保護思想の普及」として行なわれています。

これまで現地説明会、調査報告会、「長野県埋蔵文化財ニュース」(以下埋文ニュース)の刊行などを通じて、調査の公開に努めてきました。

現地説明会(1頁写真)は中島B遺跡で8月27日に開かれ70名程の参加者が(暑いなか)二時間にわたり、担当者の説明に耳を傾けていました。説明資料をもとに、質疑応答も活発でした。発掘現場はいつでも公開していますが、見学にみえた方に十分な対応をするためには、このような機会を多く持た

いと考えています。

調査報告会では、岡谷市公民館等の主催する学習会で、大久保B遺跡の成果を発表したほか、諏訪地区発掘報告会において、大久保B、中島B遺跡の報告をしました。現在、今年度調査した7遺跡の整理を続けていますので、近いうちにより詳しい報告ができるものと思います。なお報告書の発行は岡谷地区の調査終了後の予定です。

本誌にも速報を掲載しましたが、所外の調査の紹介なども多くして、保護思想の普及の一助になればと考えています。

本誌は希望者にも無料で配付しておりますので返信用封筒に70円切手をはって、岡谷市郷田2-7260の岡谷調査事務所へお申し込みください。(Y・K)

埋文センター日誌

- 12月17日 第3回埋文調査調整会議（日本道路公団、岡谷市、岡谷市教委、長野県高速道局長長野県教委、長野県埋文センター参集）
- 27日 法政大学東郷正美助教授、都立大学今泉俊文、横須賀工業高校沢祥氏等が大久保B遺跡の断層調査
- 1月8日 飯田市松尾小学校松島信幸氏大久保B遺跡の断層調査。
- 13日 県広報誌「ながの」が埋文センターの整理作業の取材
- 28日 百瀬久雄調査研究員岡谷市公民館で大久保B遺跡について発表
- 11日 百瀬長秀、和田博秋調査研究員諏訪地区発掘報告会にて、中島B遺跡、大久保B遺跡について発表
- 補（57年3月～8月）**
- 3月25日 財団設立
- 29日 第一回理事会
- 4月1日 職員発令、センター発足（県出向職員一行政職2名、教職員10名）
- 4月8日 岡谷調査事務所開所式
- 5月14日 岡谷地区調査の欽入式（中島遺跡）
- 17日 中島遺跡（A地点）調査開始
- 21日 " （B地点） "
- 6月7日 豊野町上浅野遺跡調査開始（土屋調査研究員派遣）
- 7月13日 中島遺跡（A地点）調査終了
- 8月8日 森將軍塚古墳調査員派遣（土屋調査研究員）
- 11日 上浅野遺跡調査終了

資料室から

長野事務所の移転に伴い、図書の利用が一時的に休止されます。整理はほぼ終了しており、蔵書目録の原稿も完成しましたので、近日中にお届けできる予定です。所外の利用は今まであまり多くありませんでしたが、これを機会に御活用願います。

調査資料も、市町村教委への貸出が可件がありましたが、マイクロ化などの対策がない現在、基本的には利用を抑制せざるを得ない状態です。

図書利用の再開は、本誌でお知らせいたしますが、再開にあたっては、利用規定、複写規定などを整備する予定であります。

長野県史だより

考古資料編第4冊「遺構、遺物」の構成

考古資料編も「遺跡地名表」（昭和56年刊）、「主要遺跡（北、東信）」（昭和58年刊）と2冊が発刊され、この7月には「主要遺跡（中、南信）」が刊行されて、いよいよ資料編の最後を締め括る「遺構、遺物」の編纂が本格化する。

「集成なき考古学は、目録なき図書館と同じである」という浜田耕作氏の発言のように、この作業は考古学研究にとって最も基本的なものであり、古代の生活、文化、社会の復原研究はこの完結をまって、より完成したものとなる。この意味で県内考古資料を遺跡の枠を取り払い、遺構、遺物に限って集成し、下記の項目で再構成しようとするものである。

I 長野県の考古学研究史

II 時代と編年 1 先土器時代の石器 2 縄文土器 3 弥生土器 4 古墳 5 土師器・須恵器・灰釉陶器

III 生産と生活の道具 1 先土器時代の道具 2 縄文時代の道具 3 弥生時代の道具 4 古墳時代の道具 5 古代の道具

IV 住居と集落 1 先土器時代 2 縄文時代 3 弥生時代 4 古墳時代 5 古代

V 信仰と葬制 1 先土器時代 2 縄文時代 3 弥生時代 4 古墳時代 5 古代

VI 自然科学と自然遺物 1 花粉分析 2 火山灰 3 14C年代・フィッシュントラック 4 胎土分析 5 人骨 6 自然遺物

内容は集成図を多くして、文章を少なくする方針でB5判の体裁とし、図版500頁、本文300頁を予定している。一県の考古資料をこのような構成で集成し、遺構、遺物の背後にある人間の営みをみつめようとする試みは、他県史には例をみないもので、発刊前からその成果が注目されている。

冬期間は発掘のできない地域が多い長野県内ですが南信地方などでは調査中の遺跡もあるようです。寒い中、御苦勞様です。また、年度末で報告書刊行などで忙殺されておられる方々も多いことでしょう。より良い成果を期待しております。

センターも一年を経、このニュースも前号は合併号という変則となりましたが、とにかく4号をお届けすることができました。今後も発刊の趣旨を忘れず努力いたしたいと思います。当センターの広報誌でなく、県内埋文関係の情報誌となりたいものです。

センターは現在、施設、人員、運営など将来像に多くの問題を抱えております。センターにおいても一層の努力を重ねてまいりますので、来年度も御支援をお願いいたします。

なお、長野本部は、4月から移転し、編集担当も今号もぎりです。調査中などに無理な原稿依頼を引き受けてくださった皆様に深く感謝いたします。ありがとうございました。（T）（調査第2部）